

大学生の教師認知に関する研究

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成13年10月25日受理)

Study on Teachers Cognition of University Student

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

教師認知に関する研究は、岸田(1967)、中山(1989)によって、児童対象に行われている。佐藤(1993)は、PFスタディ方式で「対人葛藤場面の解決法」をさぐっている。そのPFスタディ方式で岸田は支配的教育型認知が3分の1以上を占めているが、非教育型認知(受容的溺愛型認知及び支配的抑圧型認知)は25%程度、教育型認知(受容的教育型認知、客観的教育型認知、支配的教育型認知)は75%程度であることを見出している。これを参考に、中山は、社会志向性と課題志向性の2つの概念を用いて、児童の動機づけ特性と教師の情動的・統制的指導態度との関連性を検討している。その結果、両志向性とも高い群は、指示的情報を多く受け取り、課題志向性の優位な群は自己決定傾向が強い。逆に、両志向性とも低い群は、両極端で単純な反応が多く、受け取る情報も最も低く、社会志向性の優位な群は情報的な接触を求めている。両者の研究では性格、特に、「外向性」、「協調性」の観点の分析が詳しくないと考え、そこに焦点を当てて研究することにする。対象者も大学生に変え、記憶をたどるやりかたによって、どんな教師が子どもにいい印象を与えるのかを調べるものである。

本研究では、岸田、中山の分類方法を参考に、教師の指導態度の認知の違い、教師のPM機能の測定を行う。

仮説は次の通りである。

- (1) 協調性の高い学生は低い学生よりも、指示や助言といった情報度の高い教師の態度を求めよう。
- (2) 外向性の高い学生は低い学生よりも、相談や激励といったそれほど情報度の高くない教師の態度を求めよう。
- (3) 協調性、外向性ともに高い学生は最も多く教師から情報を受け取るのに対し、両方とも低い学生は教師から受け取る情報が少ないだろう。

(4) 男性よりも女性の方が受容的な教師に好感を持つだろう。

(方 法)

- 1) 被検者：E 大学 1 回生191名 (男性91名, 女性100名)
- 2) 調査時期：2000年 6 月
- 3) 調査項目：イ, Big Five 尺度：和田 (1996) を参考に「協調性」と「外向性」の2つの性格特性尺度を用いる。協調性については12項目, 外向性については20項目をそれぞれ5件法で評定し, 性格特性ごとの合計得点を算出する (得点範囲は協調性12~60, 外向性20~100)。この2つの性格特性得点の相対的高低により4群に分類する。つまり, 協調性の優位な群 (以下 Ae 群と略), 外向性の優位な群 (以下 aE 群と略), 両志向性ともに平均点より高い者は両志向性とも高い群 (以下 AE 群と略), 低い者は両志向性とも低い群 (以下 ae 群と略) である。

Table 1 に大学生における性格特性ごとの人数を示す。

Table 1 大学生の性格特性ごとの人数

	ae	aE	Ae	AE	計
男 性	28	18	17	28	91
女 性	18	25	26	31	100
計	46	43	43	59	191

ロ, 佐藤, 篠原 (1976) による教師の PM 機能測定項目：教師の P 機能 (目標達成機能 Performance function) に関する9つの質問項目と M 機能 (集団

維持機能 Maintenance function) に関する8つの質問項目の計17問。それぞれ2件法で評定し, 各機能ごとの合計得点を算出する (得点範囲は P 機能：0~9, M 機能：0~8)。

ハ, 教師の指導態度に関する認知の測定：岸田 (1967) を参考に, 「勉強はもうあきました。」と児童が教師に対して欲求を示す図版を用いる。いい思い出として残っている教師といやな思い出として残っている教師それぞれについて回答を求める。教師認知に関する大学生の反応を分類するため, 中山 (1989) による教師の指導態度認知に関する分類カテゴリーと岸田 (1967) による教師の指導発言の生徒による認知の定義を参考に, 分類カテゴリーを Table 2 に示す。

Table 2 教師認知に関する分類カテゴリー

分 類	反 応 内 容
受 容	①単純な受容・共感 (児童の要求に何の統制も加えずそのまま容認し, 全面的に受容するもの) ②激励・誉める (児童の要求に何の統制も加えずそのまま容認し, その態度に対して激励したり誉めたりするもの) ③相談 (要求に対する対応を保留し, 質問などによって事態を明瞭にしようとするもの) ④提案 (児童の要求を受容しながら, 指導・助言を与えるもの)
支 配	⑤指示 (要求に対して, 明確な説明や具体的な指示を与えるもの) ⑥強制 (要求に対して指示を与えるが, 内容が一方的で拒否的なもの) ⑦非難 (児童の要求, 考えを非難するもの) ⑧処罰 (児童の要求に対して, 何らかの処罰を与えるもの)
(教育) 放棄	⑨皮肉 (児童の要求に関係なく, 皮肉を言うもの) ⑩放任 (児童の要求に関係なく, 児童を放任するもの) ⑪拒否 (児童の要求を無条件に拒否するもの) ⑫その他 (驚き・困惑・意味不明等)

Table 3 教示

<p>I. “あなたの中で、いい思い出として残っている教師についておたずねします。”</p> <p>①その先生について、おたずねします。次の質問に対し、あてはまるものに○をつけてください。</p> <p>②その先生は、あなたが次のように言ったとしたら、どのように答えると思いますか？自由にお答えください。</p>
<p>II. “あなたの中で、いやな思い出として残っている教師についておたずねします。”</p> <p>①その先生について、おたずねします。次の質問に対し、あてはまるものに○をつけてください。</p> <p>②その先生は、あなたが次のように言ったとしたら、どのように答えると思いますか？自由にお答えください。</p>

4) 手続き：用紙に印刷された教示文を説明し、回答を求める。教示は Table 3 の通りである。

(結果と考察)

Fig. 1, 2, 3 に「良い思い出に残っている教師」における性格特性ごとの「受容的反応」「支配的反応」「放棄的反応」の得点グラフを示す。

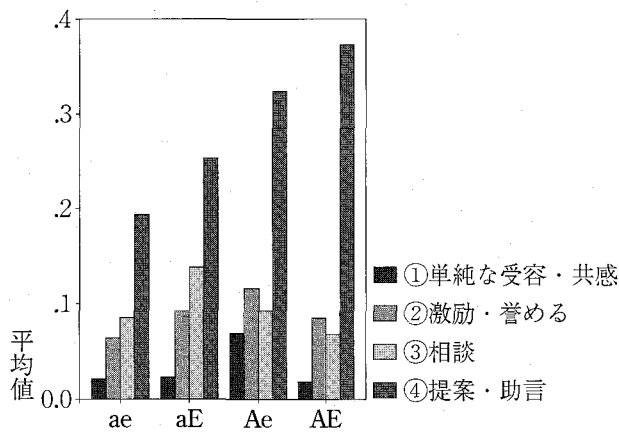


Fig. 1 受容的態度反応得点

性格特性 (4) × 各カテゴリへの反応頻度 (12) の一元配置分散分析のあと、性格特性に有意差が認められた場合、Tukey HSD 法による群間の対比較を行う。また、性別 (2) × 各カテゴリへの反応頻度 (12) の t 検定を行う。

以上から言えることは、次の通りである。

「単純な受容，共感」について、Ae 群が他の群よりもやや多い反応であるものの、全体的に反応が少なく、有意差も認められない。性差においても、男女ともおおむね同様な反応傾向であり、有意差は認められない。

「激励，誉める」について、有意差は認められず、性差についても女性の方がやや反応が多いものの有意差は認められない。

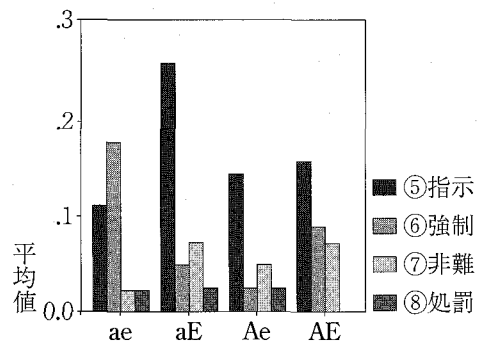


Fig. 2 支配的態度反応得点

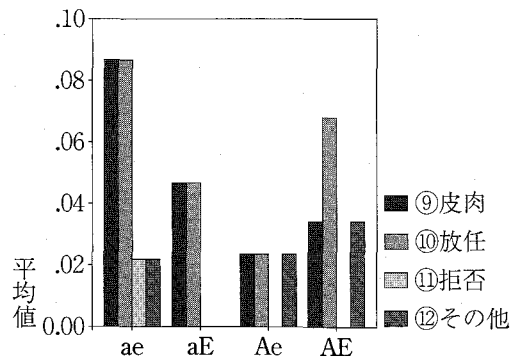


Fig. 3 放棄的態度反応得点

「相談」については、aE 群が他の群よりも反応がやや多いが有意差はみられず、性差のみに有意な傾向が認められる ($t(187) = -1.78, p < .10$)。これは、男性よりも女性の方が「相談」への反応が多いことを示している。

「提案、助言」については、AE 群の平均値が最も多く、有意差は認められない。協調性の高い群 (A 群) と低い群 (a 群) とで、「提案、助言」への反応頻度の t 検定を行ったところ、5%水準で有意差がみられる (A 群36点, a 群20点, $t(189) = -1.95, p < .05$)。性差については、女性の反応得点が多いものの有意差は認められない。

「指示」については、aE 群が最も反応が多いが、有意差は認められない。性差についても女性の方がやや反応が多いが、有意差は認められない。

「強制」については、性格特性群間に有意な傾向が認められる ($F(3, 187) = 2.62, p < .10$)。対比較によれば ae 群と Ae 群との差が有意である。性差においても有意な傾向が認められる ($t(187) = 1.86, p < .10$)。これは、男性の方が女性より「強制」への反応が多いことを示している。

「非難」については、AE 群が最も多い反応があるものの有意差は見られない。性差においても男女とも同様な反応で有意差は認められない。

「処罰」については、全体的に反応が少なく、AE 群では全く反応がみられない。性差においても、男女とも同様な反応であり、有意差は認められない。

「皮肉」については、ae 群が最も反応が多いが、有意差は認められず、性差においては、 $.10 < p < .20$ と若干の傾向が認められる ($t(187) = 1.62$)。これは、女性よりも男性の方が「皮肉」への反応がやや多いことを示している。

「放任」については、ae 群と AE 群がやや反応が多いが、有意差は認められない。性差についても、男性の方がやや反応が多いものの有意差は認められない。

「拒否」について、全体的に反応が非常に少なく、ae 群以外では反応が全く見られない。性差においては、男女とも同様な反応であり、有意差は認められない。

「その他」については、各群ともおおむね同様な反応傾向であり、有意差もみられない。性差においても、男性の方が女性よりもやや反応が多いものの有意差は認められない。

以上の結果を群ごとにまとめると、次の通りである。ae 群については、「強制」への反応が多く、全体的にみると「放棄的」反応が4群中最も多く、「受容的」反応が最も少ない。aE 群については、「激励、誉める」や「指示」の反応がやや多く、全体的に見ると、「放棄的」反応が少ない傾向にある。Ae 群については、「単純な受容、共感」の反応がやや多く、全体的にみると、「支配的」反応、と「放棄的」反応が4群中最も少ない。AE 群については、「提案、助言」への反応が多く、全体的にみると、「受容的」反応が4群中最も多い。

次に、男女別にまとめる。まず男性は女性に比べ、「強制」「皮肉」の反応が多く、全体的にみると、「放棄的」反応が多い。女性については、男性に比べ、「相談」の反応が多く、全体的にみると「受容的」反応が多い。

Fig. 4に「良い思い出として残っている教師」における性格特性ごとのPM機能反応得点のグラフを示す。

性格特性(4) × 各機能反応得点(2)の一元配置分散分析を行い、性格特性に有意差が見られた場合、Tukey HSD法による群間の対比較を行う。

Fig. 5に「良い思い出に残っている教師」における男女別のPM機能反応得点を示す。

性別 (2) × 各機能反応得点 (2) の t 検定を行う。

Fig. 4, 5 から P 機能については, aE 群が最も反応が多く, Ae 群が最も反応が少ないが, 有意差は認められない。性差においてもほぼ同様な反応傾向で, 有意差はみられない。また, M 機能については, 性格特性間に 1%水準で有意差が認められる ($F(3, 187) = 3.95$)。Ae 群, AE 群の 2 群で反応が多く, 対比較ではこの 2 群と ae 群との間で有意差が認められる。そこで, M 機能得点における協調性の高い群 (A 群) と低い群 (a 群) との t 検定の結果, 1%水準で有意差が認められる (A 群平均 7.46, a 群平均 6.92, $t(187) = -2.72$)。また, 性差についても有意な傾向が認められる ($t(187) = -1.74, p < .10$)。これは, 男性よりも女性の方が M 機能の高い教師が良い思い出として残りやすいことを示している。

以上の結果を群ごとにまとめる。ae 群については,

M 機能の反応が 4 群中最も少ない。aE 群については, P 機能の反応が 4 群中最も多い。Ae 群については, P 機能の反応が 4 群中最も少なく, M 機能の反応は多い。AE 群については, M 機能の反応が多い。次に男女別にまとめる。M 機能の反応は, 男性が少なく, 女性は多い。P 機能については, 男女とも反応傾向が同等であり, 全体として反応得点は少ない。

Fig. 6, 7, 8 に「いやな思い出として残っている教師」における性格特性ごとの「受容的反応」「支配的反応」「放棄的反応」の得点グラフを示す。

性格特性 (4) × 各カテゴリーへの反応頻度 (12) の一元配置分散分析のあと, 性格特性に有意差が認められた場合, Tukey HSD 法による群間の対比較を行う。また, 性別 (2) ×

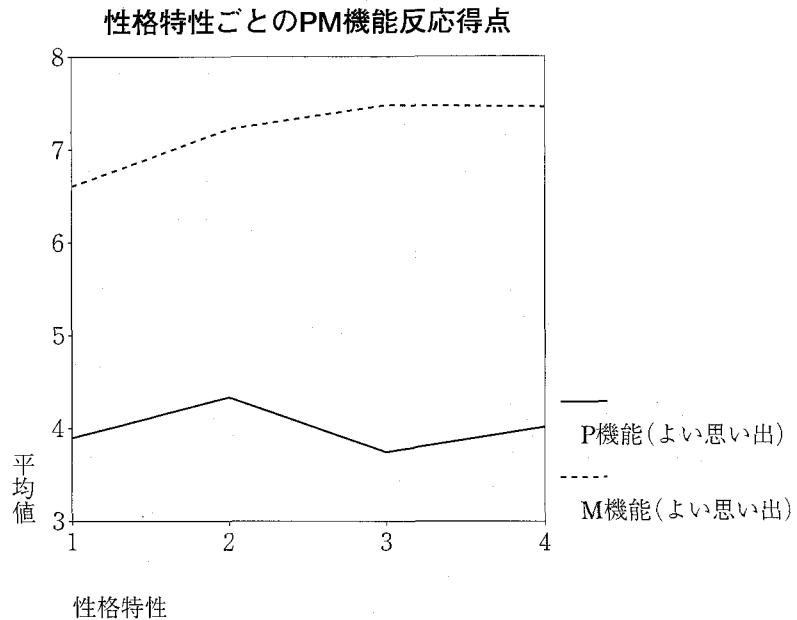


Fig. 4 よい思い出に残っている教師

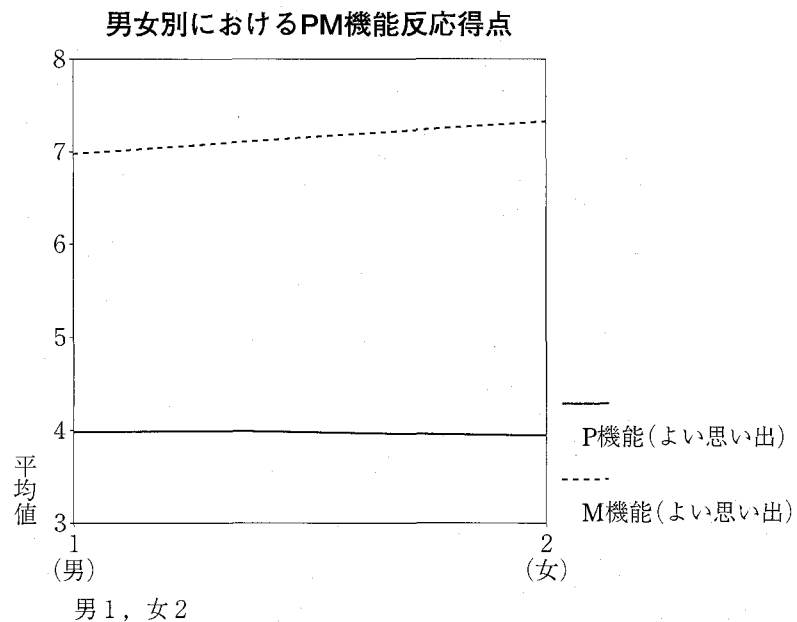


Fig. 5 よい思い出に残っている教師

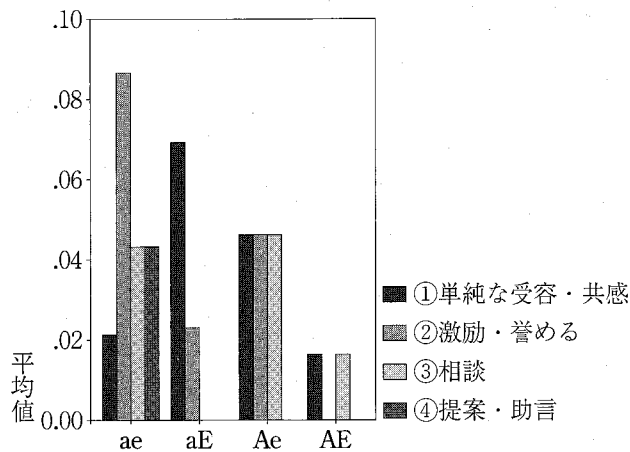


Fig. 6 受容的態度反応得点

各カテゴリーへの反応頻度 (12) の t 検定を行う。

以上, Fig. 6~8 を通して言えることは, 次の通りである。

「単純な受容, 共感」について, aE 群が最も多い反応であるものの, 各群ともおおむね同様な反応傾向であり, 有意差は認められない。性差においても有意差はみられない。

「激励, 誉める」について, $.10 < P < .20$ と有意差はないが若干の傾向は認められる ($F(3, 187) = 1.98$)。そこで, 外向性の高い群 (E 群) と低い群 (e 群) との t 検定の結果, 5% 水準で有意差が認められる (E 群 1 点, e 群 6 点, $t(187) = 2.13$)。性差においては, 女性の方が反応得点が多いものの有意差は認められない。

「相談」については, aE 群のみに反応がみられないものの, 各群ともおおむね同様な反応傾向であり, 有意差は認められない。性差においても, 女性の方の反応得点が多いものの有意差は認められない。

「提案, 助言」については, ae 群のみに反応があり, 他の 3 群には全く反応がみられない。ae 群と他の 3 群との間には有意な傾向が認められる ($F(3, 187) = 2.15, p < .10$)。性差については, 男性の方の反応得点が多いものの有意差は認められない。

「指示」については, $.10 < p < .20$ と有意差はないが, 若干の傾向は認められる ($F(3, 187) = 1.74$)。そこで, 協調性の高い群 (A 群) と低い群 (a 群) 間での t 検定の結果, 5% 水準で有意差が認められる (A 群 8 点, a 群 1 点, $t(187) = -2.20$)。性差については, 女性の方の反応得点が多いものの有意差はみられない。

「強制」について, AE 群, aE 群の反応得点が多いものの有意差は認められない。性差においても女性の方の反応得点が多いものの有意差は認められない。

「非難」については, aE 群と AE 群の反応が多いが, 有意差は認められない。性差についても, 女性の方の反応得点が多いものの有意差は認められない。

「処罰」については, aE 群の反応得点が多いものの有意差は認められない。性差についても男性の方の反応得点が多いものの有意差はみられない。

「皮肉」については, 性格特性間に 5% 水準で有意差が認められる ($F(3, 187) = 2.78$)。

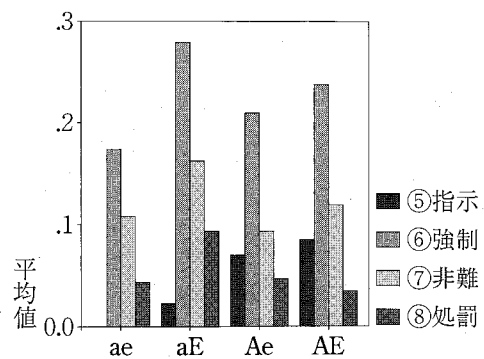


Fig. 7 支配的態度反応得点

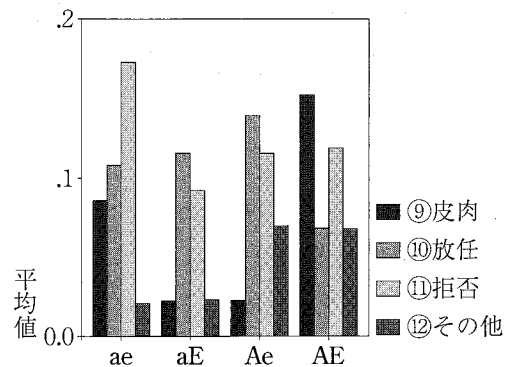


Fig. 8 放棄的態度反応得点

AE 群に最も得点が多く、対比較によると、AE 群と aE 群、Ae 群の 2 群との間に有意な傾向が認められる。性差については、男女ともおおむね同様な反応で、有意差は認められない。

「放任」については、各群とも反応傾向は似ており、有意差も認められない。性差について、女性の方の反応得点が多いものの有意差はみられない。

「拒否」については、ae 群が最も反応得点が多いが有意差はみられない。性差においては、5%水準で有意差が認められ ($t(187)=2.10$)、男性の方の反応が多い。

「その他」については、AE 群の反応が最も多いが、有意差は認められない。性差においても、男女とも同様な反応傾向で有意差はみられない。

以上の結果を群ごとにまとめると、次の通りである。ae 群は、「激励、誉める」と「提案、助言」の反応が多く、「指示」の反応が少ない。全体的にみると、他の 4 群に比べ、「受容的反応」が多く、「支配的反応」が少ない。aE 群については、「単純な受容、共感」と「処罰」の反応が多く、「提案、助言」の反応が少ない傾向にある。全体的にみると、「支配的反応」が多く、「放棄的反応」が少ない。Ae 群については、特徴的な反応はあまりみられないが、「提案、助言」の反応は少ない。AE 群については、「指示」と「皮肉」の反応が多く、「激励、誉める」と「提案、助言」の反応が少ない。全体的にみると、他の 4 群に比べ、「支配的反応」と「放棄的反応」が多く、「受容的反応」が少ない。

次に、男女別にまとめる。まず男性は女性に比べ、「処罰」と「拒否」の反応が多い。女性は、男性に比べ、「強制」、「非難」、「放任」の反応が多い。全体的にみると、女性の方の「支配的反応」が多い。

Fig. 9 に「いやな思い出として残っている教師」における性格特性ごとの PM 機能反応得点のグラフを示す。

性格特性 (4) × 各機能反応得点 (2) の一元配置分散分析を行い、性格特性に有意差が見られた場合、Tukey HSD 法による群間の対比較を行う。

Fig. 10 に「いやな思い出として残っている教師」における男女別の PM 機能反応得点を示す。

性別 (2) × 各機能反応得点 (2) の t 検定を行う。

Fig. 9, 10 から P 機能については、Ae 群が最も反応が多く、AE 群が最も反応が少ないが、4 群ともほぼ同様な反応で、有意差は認められない。性差については、有意な傾向が認められる ($t(187)=1.74$, $p<.10$)。これは、男性の方の P 機能の高い教師がいやな思い出として残りやすいことを示している。M 機能については、性格特性間に有意な傾向が認められる ($F(3, 187)=2.41$, $p<.10$)。aE 群が最も反応が多く、対比較ではこの群と AE 群間で有意差がみられる。そこで、協調性の高い群 (A 群) と低い群 (a 群) との M 機能得点の t 検定の結果、5%水準で有意差が認められる (A 群平均 1.28, a 群平均 1.99, $t(187)=2.58$)。性差については、ほぼ同様な反応傾向で、有意差は認められない。

以上の結果を群ごとにまとめる。ae 群について、特徴的な反応はあまりみられないが、M 機能への反応は、他の 4 群に比べ、やや多い傾向にある。aE についても M 機能の反応が多い。Ae 群については、P 機能、M 機能ともに 4 群中最も反応が少ない。4 群全体でみると、P 機能の反応が多く、M 機能の反応が少ない。次に、男女別にまとめる。P 機能の反応は男性に多く、女性に少ない。M 機能については、男女とも反応傾向が同等であり、全体として反応得点は少ない。

大学生がそれまでの教師をふりかえって、「良い思い出として印象深い教師」とは、どのような教師なのかをまとめる。協調性の高い群（A群）は、圧倒的に「提案、助言」が多いのに対し、協調性の低い群（a群）は、「提案、助言」について「指示」も多い。すなわち、教師からの「提案、助言」といったいわば情報度の高い反応に関しては、A群、a群ともに反応が多い。a群に関して、「指示」という形でより多くの情報を与えてくれた教師が良い思い出として残っている。次に、外向性の高い群（E群）も低い群（e群）も「提案、助言」の反応が最も多い。E群は「指示」「相談」、e群は「指示」「強制」と続いている。すなわち、E群は多くの情報を含む教師の態度に反応し、e群は支配的な教師の態度にも反応することで、より具体的に指示する教師に良い思い出として印象深いとみている。

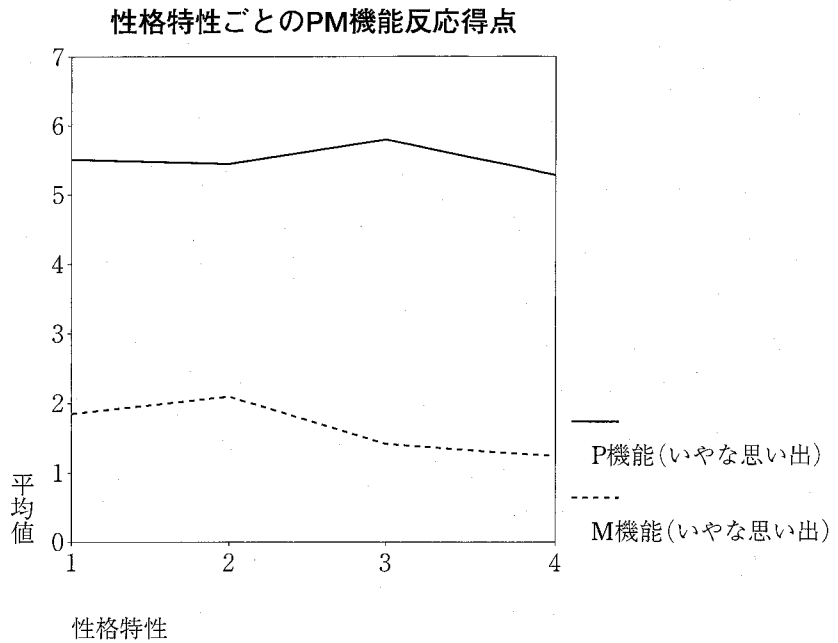


Fig. 9 いやな思い出に残っている教師

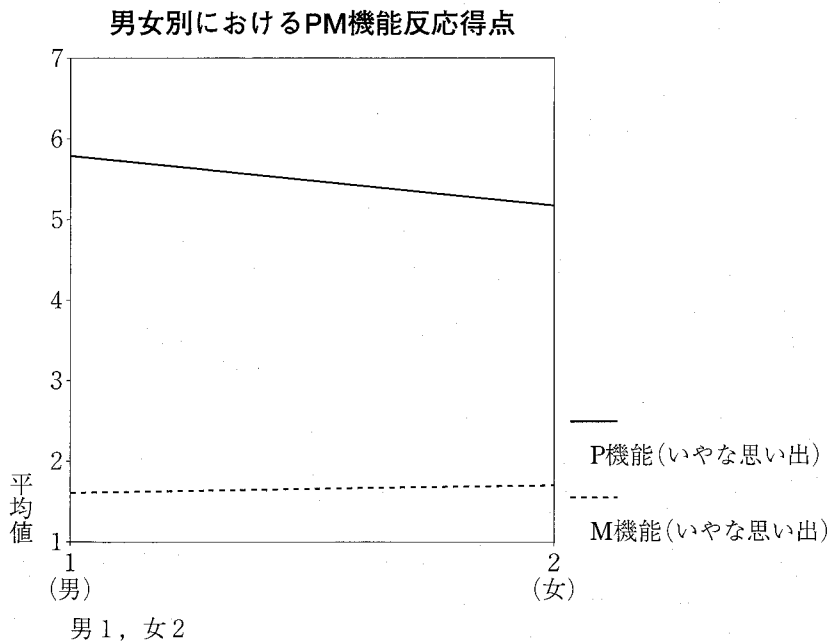


Fig. 10 いやな思い出に残っている教師

性差については、男性、女性とも「提案、助言」の反応が最も多く、それに続いて、男性は、「指示」「強制」「皮肉」、女性は、「指示」「相談」「激励、誉める」である。すなわち、男性は、「自分の意見をはっきりと伝える教師」、女性は、「教師との情報的な接触を求めるものの、意見尊重の教師」を良い思い出として残っている。

次に、「いやな思い出として残っている教師」についてまとめる。協調性の高い群（A群）も低い群（a群）も「強制」の反応が圧倒的に多い。全体的にみると、両群に共通しているのは、支配的態度と放棄的態度への反応が多いことである。a群のみ「指示」への反応が最も少ない。「いやな思い出に残る教師」に関しては、協調性の高低に関係なく、意見をほとんど聞

かずに自分の考えを押し通そうとする教師である。ただし、a群にとって、理由を明確にし、行動を促す教師の「指示」的な態度に対しては、ほとんどいやな印象をもたれていないことがわかる。次に、外向性の高い群（E群）と低い群（e群）とも「強制」の反応が最も多い。全体的にみて、両群に共通していることは、支配的態度と放棄的態度への反応が多いことである。e群は、「受容的」態度への反応がやや多い。「いやな思い出に残る教師」に関しては、外向性の高低に関係なく、意見をほとんど聞かずに自分の考えを押し通そうとする教師である。ただし、e群は、特に情報度の低い受容的態度で接する教師にもいやな印象を抱くことがある。性差について、両群とも「強制」の反応が最も多い。続いて、男性は、「拒否」「非難」、女性は、「非難」「放任」となっている。男性は、「教師の意見に従わないと自分を受け入れてもらえない」、女性は、「教師の意見に従わないと見放される」という「不安を感じるような教師」がいやな思い出として残っている。

以上から、仮説(1)~(4)は支持される。つまり、「提案、助言」や「指示」のような情報度の高い教師による印象をもち、P機能4点、M機能7.21点と集団維持機能の高い教師を高く評価している。逆に、「強制」や「非難」「拒否」というように意見を聞こうとしない教師には良い印象をもたず、P機能5.48点、M機能1.61点と集団維持機能（M機能）が非常に低いわりに、目標達成機能（P機能）が高い教師は評価されていない。

(引用文献)

- 柏木繁男 1997 性格の評価と表現 特性5因子論からのアプローチ 有斐閣
岸田元美 1967 児童・生徒の教師認知に関する測定論的研究(1) —とくに教育的指導態度に対する認知について— 徳島大学学芸紀要 第15巻 37-64
岸田元美 1987 教師と子どもの人間関係 教育実践の基礎 教育開発研究所
中山勘次郎 1989 児童の動機付け志向性と教師の指導態度の認知 教育心理学研究 第37巻 第3号 79-85
佐藤公代 1993 児童の対人葛藤場面の解決法に関する研究 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 第11号 37-54
佐藤静一、篠原弘章 1976 学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気によぼす効果—数量化理論第Ⅱ類による検討— 教育心理学研究 第24巻 第4号

(注)

問題作成、統計処理にかかりました河野幸枝氏、被検者の皆様に御礼申し上げます。